# 黄表紙に描かれた寛政改革

## ― 風刺と滑稽 ―

有木志織

**はじめに**

黄表紙は、洒落や風刺を特色とする草双紙の一種である。これらの中には寛政改革の影響を感じさせる作品が複数存在する。本稿では、寛政改革期における政策や世相を取り入れた、または影響を受けたと考えられる黄表紙を複数取り上げ、時代背景をふまえながら概観し、大きな流れを俯瞰することで視野広く各作品を比較する。その中で特に内容面の風刺要素やその対象、傾向・類似点などに着目し、『鸚鵡返文武二道』と『天下一面鏡梅鉢』の二作品における、先行研究ではあまり言及されてこなかった隠れた風刺性を明らかにしていく。かつ、風刺対象や滑稽描写の全体的傾向を自らの観点でまとめ、これらの黄表紙が、モチーフとして寛政改革期の政策・世相をどのように取り上げ、いかに黄表紙らしい諧謔としてエンターテインメントに昇華しているのか考察結果を述べる。

最初に、寛政改革期における黄表紙について述べられている論文や書籍など、先行研究の概要をまとめる。

小池藤五郎氏は『山東京傳の研究』(1)で京伝の作風に着目し、他の作者と比較して風刺が端的ではなく、朧化に優れているなどの指摘を行っている。

水野稔氏は『黄表紙・洒落本の世界』(2)所収の「幕政風刺の黄表紙－寛政改革をめぐって－」において、風刺的な作についてあらすじを紹介しながら解説し、出版事情も考慮しつつ見解を述べる。

前田愛氏は「寛政の改革と江戸文壇　概説」(3)にて、戯作者に着目しながら黄表紙の変貌や洒落本から滑稽本への変容など、ジャンルを問わずその大きな流れを論じ

ている。

浜田義一郎氏は「寛政改革の黄表紙と「よしの冊子」」(4)において、「よしの冊子」から読み取れる説、噂などの側面から当時の事件や戯作者、黄表紙作品について述べる。

棚橋正博氏は、「寛政元年板黄表紙考－『鸚鵡返文武二道』・『天下一面鏡梅鉢』・『黒白水鏡』・『孔子縞于時藍染』をめぐって－」(5)において、筆禍・出版事情を中心に論じ、また「『黒白水鏡』と寛政の改革－筆禍の原因－」(6)では『黒白水鏡』を中心に取り上げ、筆禍の理由についてまとめている。さらに、『山東京伝の黄表紙を読む　江戸の経済と社会風俗』(7)所収の「寛政改革と山東京伝の黄表紙」において、京伝作周辺に範囲を絞り一作品ずつとりあげながら解説と考察を加えている。

南和男氏は『江戸の風刺画』(8)所収「田沼の失脚」「寛政改革への批判」で、挿絵を中心に、いくつかの黄表紙を取り上げながら風刺的要素に言及している。

これらの先行研究をふまえ、改めて私見と考察を述べ、また新たに指摘を行うことを本稿の目的の一つとする。

## 一　対象とする十二作品の内容と考察

対象とする十二作品について、おおまかな作品内容、これまでなされてきた指摘や、私自身の考察などをまとめたものを稿末に挙げる〈表1〉とし、加えて、実際の寛政改革に関わる政治と社会の様相を年譜にまとめ、〈表2〉とする。本章ではこれらの表に従い、作品群の全体像をとらえながら、各事項についての検証・考察結果を列記していく。

〈表2〉を一見して、天明八年（一七八八）から寛政二年（一七九〇）に作品が集中していることがわかる。作品内容と照らし合わせてみると、起きた事件や出された政策など、比較的すぐさま取り入れる傾向がみえてくる。政策の方針が決定して間もなく、あるいは定信が着任して間もなく、それが新鮮な話題として黄表紙に盛り込まれ、世に出されているのである。寛政改革が当時世間の注目を浴びる話題としてとらえられており、戯作者たちにとってこういった世相の変化は恰好の題材だったのだろうと考えられる。

〈表1〉に視点を移し、『悦贔屓蝦夷押領』や『富士人穴見物』のように、風刺とはとらえられない作が存在することについて言及したい。『悦贔屓蝦夷押領』は蝦夷の様子を面白おかしく描くのみで、政治的要素はみられ

ない。また『富士人穴見物』においても、通意識の描写に重きを置き、政治を思わせるものではない。寛政改革に影響を受けているとはいえど、これらの作品では政策や世相がただ単にモチーフとして扱われており、直接的なからかいの要素がみられないのである。政策や世相を下敷きにしているからといって、そのものを茶化すわけではない場合もあり、必ずしも風刺として読めるものではないことがわかる。

次に、仮託する登場人物のパターンに焦点をあてる。為政者をモチーフとする場合、はっきりとその人を思わせるような露骨な表現を避け、歴史上の人物に見立てることで読者に察させる形で描かれることが多い。そこで、松平定信や当時の将軍徳川家斉が歴史上のどんな人物に仮託されているのか、傾向を見出し、作品ごとに検証した。まず『文武二道万石通』においては、登場人物の出す政策や立ち位置・主従関係などから推察して、畠山重忠が定信、源頼朝が家斉に対応しているといえる。また『黒白水鏡』では、定信が畠山重忠の跡目に仮託されると思われる。どちらの作においても、定信と家斉は畠山重忠とその周辺人物に擬されていることがわかる。一方『鸚鵡返文武二道』では、定信が菅秀才、家斉が醍醐天皇に見立てられ、『天下一面鏡梅鉢』では定信が菅原道真、家斉が同じく醍醐天皇とされていた。菅秀才とは浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』の登場人物で、菅丞相つまり菅原道真の子である。よって両作品とも定信は菅原道真にまつわる人物に仮託されているといえよう。仮託対象を改めて見てみると、畠山重忠と源頼朝、菅原道真と醍醐天皇らなど、いずれも歴史的に肯定的にとらえられている人物だとわかる。風刺の姿勢をとるかどうかは別として、当世公である家斉や定信は名君に見立てて描かれる傾向があるといえる。これについては後述するが、表面上は好意的な立場をとっているのではないかと推測する。

取り上げたものの中で、いくつかの作品にまたがって類似する趣向がみられた。便宜上それぞれの趣向を「行き過ぎもの」「裏返しもの」とし、分類を行った。ここでは簡単にその類別を記す。「行き過ぎもの」とは、現実の政策・世相を軸に、行き過ぎた世の中を描くものである。政策の効果が強く現れすぎて、かえって世間が混乱に陥る様子などとして描かれる。改革政治にとまどう人々の様子が誇張され、読者を笑わせる。『鸚鵡返文武二道』『玉磨青砥銭』などがこれにあたる。「裏返しもの」は、当時倹約的であった世相を裏返し、金満な世として描く滑稽である。世相を穿つ上で、裏返しの趣向は皮肉で現実とのギャップが面白い。これについては『孔子縞于時藍染』が先行し、『天下一面鏡梅鉢』『黒白水鏡』の二作品がそれを模倣するという、趣向の移入があ

ったと考えられる。「行き過ぎもの」も「裏返しもの」も、改革の世相へ対応させる意識の上に成り立つのだろう。

〈表1〉から作品群を俯瞰すると、時代が進むにつれ取り上げられる対象が政策や具体的な事件などから世相へと変容する傾向が見て取れる。これは筆禍に影響するものだと考えられる。『鸚鵡返文武二道』は、幕政批判ととれる内容であることから、作者が定信に召喚されたことが知られる。『天下一面鏡梅鉢』もまた、治世の風刺ととれる内容であり、絶版を命じられることとなった。『黒白水鏡』は、特に露骨な表現で田沼を批判したため絶版となり、作者は手鎖の上江戸払い、画工は過料の刑を課せられた。一方、『文武二道万石通』は、自主的に修正を加えて再版しており、田沼を笑いものにする内容でありながら、あまり露骨とはいえない表現となっている。『時代世話二挺鼓』もまた、田沼を悪者として描きながらそれを露骨に匂わすことを避けており、筆禍を免れ後年には再版もなされている。これらのことから、定信政権はもちろんのこと、前代の田沼政権に関してであっても、幕政に対して言及するものは禁忌の対象となっているのではと推測する。『文武二道万石通』と『時代世話二挺鼓』が筆禍に問われなかったのは露骨さがないためではないか。筆禍の回避には、作者の婉曲の巧みさが問われるといえる。

こうしてみると筆禍の影響は確かにあり、後年になるにつれ、禁忌になるべく触れないように、筆禍を避ける工夫がなされるようになっていったのではと想像できる。一方で、幕政でなく世相を主に風刺する傾向にあった、町人作家の山東京伝作品が集中していることも考慮すべきであろう。

## 二　いつわりの聖代

『鸚鵡返文武二道』と『天下一面鏡梅鉢』の二作品にはいくつかの類似点がある。まず、仮託対象である。どちらも時代背景を延喜の聖代に設定し、将軍家斉を醍醐天皇に見立てている。二つ目の類似点に、麒麟や鳳凰の登場が挙げられる。麒麟や鳳凰は中国の想像上の動物で、聖王の兆として出現するとされている。延喜の聖代という設定上、聖獣の出現を通して仮託対象の家斉を名君としてまつりあげ、定信政権をおだてているようにも読み取れる。しかし、そう解釈するにはいくつかの違和感があるということを指摘しておきたい。

《『鸚鵡返文武二道』の違和感》

①文武奨励における武の奨励が失敗に終わっている。

②鳳凰の登場は人々の揚げる鳶凧を仲間と勘違いし

『鸚鵡返文武二道』より、茶屋にて見世物にされる鳳凰(9)

『天下一面鏡梅鉢』より、見世物にされる麒麟(10)

てのもの。

③麒麟と鳳凰を見世物にする。

《『天下一面鏡梅鉢』の違和感》

①金満な世の中という設定であるのに、火山灰に擬して降る金を人々が喜んで拾う。その一方で金銀を捨てたいとぼやく描写がある。

②挿絵と文章の内容の不一致。景気のいい場面に対して挿絵では人々の困った様子が描かれる。

③麒麟と鳳凰を見世物にする。

『鸚鵡返文武二道』に関して先行研究の大多数は、定信政権を揶揄するようなところはない、という意見のものだった。しかし、南和男氏は『江戸の風刺画』(11)において次のように述べる。

名君の出ないうちに麒麟が出現するのは、もはや名君の世に出る望みはないのかと、孔子が嘆いたという故事がある。したがって右の麒麟の出現は、定信の治世にたいする非常な皮肉であるといわねばならない。

ここでいう「孔子の故事」というものの出典が明らかにされていないのだが、『史記』の「孔子世家」に該当箇所と思われる〈獲麟の故事〉を見出した。次にこれを引用する。

○『史記』孔子世家

［原文］(12)

魯哀公十四年春、狩大野。叔孫氏車子鉏商獲獣。以為不祥。仲尼視之曰、麟也。取之。曰、河不出図、雒不出書、吾已矣夫。

顔淵死、孔子曰、天喪予。及西狩見麟、曰、吾道窮矣。喟然歎曰、莫知我夫。子貢曰、何為莫知子。子曰、不怨天、不尤人、下学而上達。知我者其天乎。

［書下し文］(13)

魯の哀公十四年春、大野に狩す。叔孫氏の車子鉏商、獣を獲たり。以って不祥と為す。仲尼これを視て曰く、「麟なり」と。これを取る。曰く、「河は図を出さず、雒は書を出さず、吾已んぬるかな」と。

顔淵、死するや、孔子曰く、「天、予を喪ぼせり」と。西の狩に麟を見るに及びて、曰く、「吾が道窮せり」と。喟然として歎じて曰く、「我を知るもの莫きかな」と。子貢曰く、「何ぞ子を知るもの莫しと為す」と。子曰く、「天を怨まず、人を尤めず、下学して上達す。我を知る者は其れ天なるか」と。

魯の哀公十四年の春、大野（山東省鉅野県）で狩猟があり、叔孫氏の車士鉏商が獣（麒麟）を仕留める。一同はこれを不吉とした。孔子は聖王があらわれる瑞兆でもないのに麒麟があらわれたのを嘆き、もはや聖王の出現する兆しはないのだと悟る。また、最愛の弟子顔淵が死んだとき、西方の狩りで麒麟を獲ったのを見てさらに「わが道もここに窮した」と痛嘆する。この〈獲麟の故事〉は、荒廃した時代における麒麟の出現とその死から、時勢を慨嘆する故事といえよう。

これを踏まえると、政策の失敗を示唆している点といい、南氏の主張するように『鸚鵡返文武二道』は幕政批判的要素をはらんでいるといえる。では、『鸚鵡返文武二道』と類似性のある『天下一面鏡梅鉢』においてはどうだろうか。同じように麒麟の登場は、〈獲麟の故事〉と結び付けられるところがあるのではないかと考えた。

『天下一面鏡梅鉢』は先行研究でこれに関して特に言及はなされてない。政策に対する茶化しなどはいくつか指摘されているが、麒麟や鳳凰の登場に関する解釈が述べられているものはないといえる。そこで改めて検証を試みた。『天下一面鏡梅鉢』における麒麟の登場場面を引用する。

昔、きりんといえる軽業師ありしよし、それは人間、これは正真正銘の麒麟の見世物出で、はやること見物山のごとし。（左隅の客）「この世の中に何

うそをつくもんだ。看板に偽りなしだ」（唐人風の見世物師）「これが聖人の西に狩りして得給いし獣でござります。体の火炎で煙草を吸いつけてみせましょう」(14)

「西方の狩り」というのは『史記』の〈獲麟の故事〉にみられる記述である。このことから、『天下一面鏡梅鉢』の麒麟の登場は『史記』を下敷きにしたものだと考えてよいといえる。そうするとこれは、『鸚鵡返文武二道』と同じように、めでたいものではなくむしろ悪い意味にとらえられる。他の違和感も、幕政批判の姿勢をひそかにのぞかせているものだと考えれば納得できるだろう。

加えて、新たに両作品における庶民の反応に着目した。それぞれの違和感にも挙げたように、本来なら神聖なはずの麒麟や鳳凰を「珍しい」として、あろうことか見世物にしている。つまり、聖獣の本当の価値をわかっていないのだ。同様のことが『史記』にもいえる。麒麟を「見たことのない不吉な獣」として、あるまじきことにそれを殺してしまう無知、人々の罪深さである。こういった、聖獣に対する人々のおろかな行動という点からも、荒れた時勢を表現しているのではないだろうか。『史記』の記述を下敷きに、聖獣を登場させることで逆に廃れた治世を、さらに民衆の反応によって荒廃した世相を示しているのだ。以上のことから、『鸚鵡返文武二道』と『天下一面鏡梅鉢』の内容は幕政批判と解釈できる。

## 三　滑稽描写

本章では、当時の政策・世相にそれぞれ注目し、黄表紙の中でこれらがどう面白みに変えられているのか分析する。

まず田沼時代の事項を見ていく。当時行われた北方調査やそれに伴う世間の蝦夷地への関心は、『悦贔屓蝦夷押領』においてその片鱗がみられる。蝦夷の様子をおもしろおかしく自由な発想で描き、タイムリーな話題を取り上げつつ読者を笑わせている。『黒白水鏡』では、田沼の運上政策をもじったと思われる「ふんぢやう」というものがあった。金満な世という現実を裏返した設定の中で、金銭を民に配る「ふんぢやう」が愚策として扱われる点のみが現実と重なり、皮肉である。田沼失脚に関しては、天明四年三月二十四日、田沼意次の長男意知が江戸城中で佐野善左衛門政言に斬られて死亡した、いわゆる「佐野の事件」が有名だが、この事件も複数の作品で題材とされている。『時代世話二挺鼓』では、『将門記』の世界に仮託しながら、田沼に見立てた平将門を悪者とし、佐野に見立てた藤原秀郷が将門を討ち取る内容である。しかしその表現はあからさまとはいえず、佐野

の事件を匂わせる程度にとどめる。『黒白水鏡』においては、前述した「ふんぢやう」など田沼の政治を悪政としておもしろおかしく描き、佐野の事件の要素を絡めて比較的露骨に描かれていた。

その後の松平定信の治世では、文武奨励、儒教奨励、倹約令などの政策が強い印象を残したようだ。

文武奨励を取り上げる作品として、『文武二道万石通』では、富士山の穴の内で武士たちに三つの穴を選ばせ、文に秀でた武士、武に秀でた武士、ぬらくら武士に分類するさまが滑稽に描かれる。富士の人穴探査をほのめかすと同時に、当時強力に行われた文武奨励を思わせている（定信の江戸市中巡回を意識したと思われる作には、富士の人穴を巡回し通意識を体得する『富士人穴見物』や、地獄を巡る小野篁に仮託する『照子浄頗梨』なども存在する）。『鸚鵡返文武二道』においては、政府による文の奨励・武の奨励で、武士たちが勘違いして空回り、むしろ世の中が混乱してしまうなど行き過ぎてしまった文武奨励とされている。一方、『天下一面鏡梅鉢』の遊女までもが文武に精を出す様子、『照子浄頗梨』の地獄で学問・武術に励む様子というように、本来関係のない人や場所でも不必要に文武に励むという形で茶化される場合もあった。

儒教奨励策も同様に「行き過ぎ」による滑稽が多い。『孔子縞于時藍染』では、儒教の伝搬によって人々が貧しさを徳の高いものとするようになり、金を疎んじる世の中になったと大げさに洒落ている。『天下一面鏡梅鉢』においても、皆の道徳心が高まったことにより道の譲り合いさえ過剰になったとし、その滑稽ぶりを笑いものにする。

倹約令を取り上げたものとしては、『玉磨青砥銭』のように、倹約が行き過ぎ、芝居、遊里などの無駄が一切なくなった世の中を描いたものがある。『行儀有良礼』のように、邪魔な金銀を天上界に引きあげて処分するという場面を作り、極端な形で倹約が実行されていく様子を描いたものもある。『照子浄頗梨』において描かれた、食べ物が燃えてなくなってしまう餓鬼地獄も、この倹約令を意識してよいのかもしれない。

その他、当時の不況については、『孔子縞于時藍染』や『天下一面鏡梅鉢』で、不況を裏返して金満な世の中を描くという方法で取り上げられ、天明の飢饉も、『孔子縞于時藍染』『天下一面鏡梅鉢』にて、裏返して豊かすぎる世の中を描くことで表される。打ちこわしなどの事件もまた、『天下一面鏡梅鉢』にて同様に裏返し、安全な世の中に不必要な戸を蹴破るという描写がされている。さらに、大きな事件だった浅間山の噴火もまた、『孔子縞于時藍染』や『天下一面鏡梅鉢』において、火

山灰に擬してお金が降りつもるという裏返しの形で描かれる。

多くの場合、「行き過ぎ」または「裏返し」の趣向での誇張という方法が採られていることがわかる。いかに面白くみせるかというエンターテインメント的側面での戯作者たちの工夫が見受けられるが、いずれも、程度の違いこそあれ皮肉や風刺といった意味合いは少なからず存在するのであろう。

## おわりに

今回取り上げた黄表紙群は内容面に多様性があり、一概に分類できるものではなかった。しかし、見立てる人物のパターンや趣向の類似、風刺対象の傾向などはみてとることができた。

『鸚鵡返文武二道』と『天下一面鏡梅鉢』は両作品とも延喜の聖代に仮託され、一見家斉や定信を名君として持ち上げているように思える。しかしいくつかの違和感が示唆するように、風刺の針がいたるところに見え隠れする。聖代に仮託することで表面上は幕政支持の姿勢を見せながら、実は両者とも「いつわりの聖代」を描き出したものだといえる。

滑稽描写では、政策関連は「行き過ぎ」の趣向として穿つ傾向があった。風刺的な場合は戒めとして描かれ、行き過ぎて結果的に失敗するという展開になっている。風刺要素が薄く、ただモチーフとして取り上げられる場合は滑稽味を強調する点で機能している。一方、世相関連は現実を裏返す傾向があった。不況な現実と正反対に、作品中では金を疎い、押し付け合う皮肉が効果的である。

民衆の大きな関心の対象となった寛政改革。これを黄表紙に盛り込むことで、当時を生きる読者の共感を呼び、それと同時に少しのぞかせた風刺の針で世間を穿ってみせているのである。風刺とは言っても、幕府に対する怨念を晴らそうなどという悪意のこもったものではない。多少の皮肉を込めつつも、あくまでエンターテインメントとしておかしみ・滑稽味を描出しようとする点に、黄表紙の諧謔性があるのだといえよう。

〈表1〉対象作品一覧

| 年 | 作品名 | | 作者／画工／板元 | 内容[15] | 備考【究行研究で既に指摘されている見解】[16] | 考察 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 悦鼠屓蝦夷押領（よろこんぶひいきのゑぞをし） | 三巻三冊<br>十五丁 | 恋川春町作／北尾政美画／蔦屋重三郎 | 義経伝説の世界に仮託し、田沼時代に盛んになった北方探査やそれに伴う風聞、当時騒々しくなった北方ロシアとの交渉事を撮合させ、当時の情勢を意識して構成される。義経の江戸征服。 | 蝦夷と奥蝦夷は両地ともにわかに幕府や世間の関心の的となってきたことである。【『江戸の戯作絵本　第三巻』】全体の構成に緊密さを欠く憾みはあるものの、時世相を扱った懐の深い作ということができる。【『黄表紙総覧』】 | 蝦夷の様子を面白おかしく描く。政策や世相を下敷きにしているが、そのものを茶化しているわけではない。風刺ではなくモチーフにしただけという印象。政治的要素は感じられない。 |
| 天明八 | 文武二道万石通（ぶんぶにどうまんごくとおし） | 三巻一冊<br>十五丁 | 朋誠堂喜三二作／喜多川行麿画／蔦屋重三郎 | 鎌倉時代を背景とし、寛政改革頭初の大名、幕臣社会をうがつ。幕臣の人物評など。定信の政策（文武奨励・出精者の調査など）をもじって読者の笑いを誘う。武士たちの狼狽ぶり。ぬらくら武士の分類。畠山重忠を定信に見立てる。 | 刊行してまもなく大評判を呼ぶ。市中を売り歩くところ日を待たず売り切れに。当局の忌憚に触れることを懸念し、新たに板を刻し、さらに修正を加えた。作者の喜三二は佐竹藩の江戸留守居。【『黄表紙総覧』】 | 新政謳歌の立場をとっており、田沼一派を悪者としているように読める。幕政批判ではない。再版によってすこし暗示がぼかされる。 |
| | 将門秀郷時代世話二挺鼓（まさかどひでさとじだいせわにてうつづみ） | 二巻二冊<br>十丁 | 山東京伝作／喜多川行麿画／蔦屋重三 | 『将門記』の世界に仮託しながら田沼失脚の事件をほのめかす。佐野の事件など。将門を田沼一派に、秀郷を佐野に見立てる。将門に六人の影武者があったという伝説。 | 巧みな婉曲化によって筆禍を逃れ、後年再版も許される。【『江戸の戯作絵本　続巻二』】 | 佐野を称賛し、田沼を悪者として描く。しかしそれと匂わすことを避けて表現されており、ほのめかす程度。 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 天明八 | 仁田四郎富士人穴見物（にたんのしろうふじのひとあなけんぶつ） | 三巻三冊 十五丁 | 山東京伝作／北尾政演画／榎本惣右衛門 | 畠山重忠が頼家公の意を受け、堅物の仁田四郎をして富士の人穴より世の中を巡察させ、通意識を体得していく次第を描く。定信の市中巡回に擬し、改革を風刺しているという解釈もあるが、あくまで趣向を借りたまでで、むしろ主眼は通意識を探るところに置かれている。 | 時世相のうがちに終始し、時にはぐらかし、時に故事付け付会と、黄表紙的諧謔がいかんなく発揮され、この手法は『照子浄頗梨』へとつながる。【『黄表紙総覧』】 | 風刺とはいいづらい。世相は取り入れるが政治向き云々とはいえない。 |
| 寛政元 | 鸚鵡返文武二道（あふむかえしぶんぶのふたみち） | 三巻三冊 十五丁 | 恋川春町作／北尾政美画／蔦屋重三郎 | 改革政治に振り回される武士たちを逐一戯画化して揶揄。万石通しによってふるいわけられた武士たちが定信の政治改革に対していかにふるまったか。文武奨励や倹約令を思わせ、改革政治下に動揺する人心を茶化す。麒麟の出現。醍醐天皇を将軍家斉に、菅秀才を定信に見立てる。 | 売れ行きは甚だよし。『文武二道万石通』を踏襲。「鸚鵡」の語には定信の『鸚鵡言』の影。寛政元年四月、作者春町は定信の召還に病気を理由として応じず、同年七月七日病没したと伝えられる。自殺説あり。春町の主君小島候松平丹後守信義の作になるとの風聞も。【『江戸の戯作絵本　第三巻』】 | 表現が少々露骨。武士の勘違いや行き過ぎを笑いものにする。一度「武」の奨励に失敗する点や最後にわざとらしく鳳凰や麒麟が登場する皮肉から、定信批判と捉えてよいのでは。 |
| | 孔子縞于時藍染（こうしじまときにあいそめ） | 三巻三冊 十五丁 | 山東京伝作／北尾政演画／大和田安兵 | 現実を逆転して描く趣向。儒教の教えが広まり、カネが疎まれる時代に。当代の経済的困窮や災害を金満の世に逆転し、これ | 『黒白水鏡』、『天下一面鏡梅鉢』と類似。処罰の難を免れる。【『黄表紙総覧』】 | 世相を風刺する。しかし田沼の失脚や佐野事件には一切触れず、政治向きをやや茶化すのみ。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 寛政元 | 飛脚屋忠兵衛仮宅居梅川奇事中洲話 | 三巻三冊 十五丁 | 山東京伝作／北尾政美画／蔦屋重三郎 | 衛，榎本惣右衛門（再版） |
| | 天下一面鏡梅鉢 | 三巻一冊 十四丁 | ［唐来参和作］／栄松斎長喜画／［蔦屋？］ | |
| | 世直大明神金塚之由来 | 二巻一冊 | 石部琴好作／北尾政演画／ | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| に改革治下の模様をからめて滑稽世界を作り出す。主に町人社会の模様をうがつ。 | 田沼意次追罰の時流を背景とするが、寛政改革異聞といってよい特色を持つ。土山と誰が袖にまつわる事実や噂、近松門左衛門の『冥土の飛脚』の梅川・忠兵衛の悲劇、火災による吉原の移動などをふまえてない交ぜにして脚色。 | 寛政の改革の社会状況（文武奨励・倹約令・浅間山噴火・不況など）を示唆し、それを極端に滑稽化して表現。醍醐天皇は徳川家斉、道真は松平定信をさす。しかし二人は最初に出るのみであとは当時の事件や世相を裏返す。 | 田沼がとった天明の飢饉や幕府および諸藩の経済的破綻を救済するための諸政策を徹底的に揶揄。佐野の事件に始まる田沼一派の凋落を、これに |
| | | | |
| 世相・事件を風刺する。一貫したストーリーはなく、混戦させることではぐらかすか。 | 政策を茶化す面もあるが、主には世相を風刺。太平の世として描かれるが違和感あり。治世に対する風刺ととれるのでは。 | 田沼一派を露骨に批判。悪政として描く。定信の新政に対する批判は見られず。むしろ好意的か。 | |

題名は「雉子も鳴かずばうたれまい」のもじりで吉原の中洲の仮宅営業を当て込む。筆禍は逃れる。【『黄表紙総覧』】

非常に好評。幕府に絶版を命じられる。逆転趣向に関して『孔子縞于時藍染』と似るが、こちらだけとがめられたのは手法が見透かされたためか。参和の署名がないため、作者について若干の疑問。【『江戸の戯作絵本　第三巻』】

たちまち絶版に。作者の琴好は手鎖の上江戸払い、画工の政演は過料（罰金）の刑を受ける。政演の絵によって本書が露骨な落書に堕すことがな

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 寛政元 | 黒白水鏡（こくびやくみつかゝみ） | 十丁 | 板元不明 | 代わって登場する定信政権にからめ、下世話にかつ町人の怨念をこめて描く。現実を裏返す趣向。畠山重忠の跡目を定信に見立てる。 | かったといっても過言ではない。【『江戸の戯作絵本　続巻二』】 | | |
| 寛政二 | 張かへし行儀有良礼（ぎやうぎあちれ） | 三巻一冊<br>十五丁 | 山東京伝作／兎角亭亀毛画／［大和板？］ | 篤実な世の中。遊里に舞台を限定。未来記型の構想でうがつも、諷するところはほとんどみられない。邪魔な金銀を天上界に引き上げ、生臭坊主などを拝したとするあたりに、わずかに寛政改革治下にあって緊縮政策や教化政策に従順する社会世相を取り上げているとみることもできるか。 | 『孔子縞于時藍染』を前編とする。あまり改革政治を穿つことを避けるのは、『黒白水鏡』での筆禍の影響か。【『黄表紙総覧』】 | 遊里の世相を対象に風刺。あからさまな表現はなく、政治的要素もあまり感じさせない。 | |
| | 太平記吾妻鏡玉磨青砥銭（たまみがくあおとぜに） | 三巻三冊<br>十五丁 | 山東京伝作／喜多川歌麿画／蔦屋重三郎 | 鎌倉北条時頼公の御代、諸人が生真面目になり、無駄のない世の中になるところ、その行き過ぎを是正すべく青砥藤綱はすべて元通りにし、穴あき一文銭の「吾唯知足」の四文字を忘れるなと教訓する。改革政治にとまどう江戸庶民の反応を滑稽誇張し皮肉る。 | 作柄に何か不足でもあったのか、刊行が一年遅れであったと考えられている。【『山東京傳全集　第二巻』】 | 庶民生活を中心に世相を風刺。改革に戸惑う庶民を滑稽に描く。 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 寛政二 | 地獄一面照子浄頗梨（ちごくいちめんかゞみのじやうはり）<br>三巻三冊<br>十五丁 | 山東京伝作／北尾政演画／蔦屋重三郎 | 冥府に往来したという小野篁伝説に擬えながら、当世風俗を地獄の様子に付会させて、寛政の改革による文武二道奨励にとまどう武士や庶民の姿を穿つ。 |

『黒白水鏡』による筆禍事件が京伝に一時戯作を断念する気持ちを抱かせるなど保身的態度をもたらし、本書における茶化しの姿勢を後退させ理屈へ落ちた笑いへと作風が転換。【『江戸の戯作絵本　第三巻』】

世相を風刺する。政策を茶化す部分もみられるが、あくまで社会風俗的に描かれるため、政策批判とも賛同ともとれず。

〈表2〉寛政改革期略年譜（17）

| 年 | 政治 | 社会 | 作品 |
|---|---|---|---|
| 一七七二（安永元） | 一・一五　田沼意次老中となる（側用人も兼ねる）<br>一一・一　意次の長男意知が奏者番に | 二・二九　江戸で大火発生（目黒行人坂大火） | |
| 一七七三（安永二） | | 三～五月　全国で天然痘が猛威をふるう | |
| 一七七四（安永三） | 飛騨屋久兵衛、蝦夷地でアイヌと交易を始める | | |
| 一七七五（安永四） | | 一月　恋川春町の『金々先生栄花夢』が評判となり、「黄表紙」が生まれる | |
| 一七七九（安永八） | 八・七　ロシア船が、通商を求めて来航 | | |
| 一七八〇（安永九） | 下総国印旛沼の再干拓が開始されたが、大洪水で中止へ | 六月　江戸に大洪水が発生 | |
| 一七八二（天明二） | | 日本各地を異常気象が襲う | |
| 一七八三（天明三） | 一一・一　意知が若年寄に<br>一二月　倹約令（天明の飢饉による七ヵ年の倹約令） | 七・六　浅間山噴火　天明の飢饉 | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一七八四（天明四） | 三・二四　意知が江戸城で佐野善左衛門政言に斬られる（四・二死亡） | | | |
| 一七八五（天明五） | 四・二九　蝦夷地探検 | | | |
| 一七八六（天明六） | 八・二七　老中田沼意次、罷免される<br>九・八　徳川家治歿 | | 『鸚鵡言』 | |
| 一七八七（天明七） | 四・五　徳川家斉、将軍宣下<br>六・一九　松平定信老中首座となる<br>七・一　政事を享保の改革に復することを宣言（寛政の改革）<br>一〇・二　田沼意次の所領二万七千石を没収し、蟄居謹慎を命ずる（追罰） | | 五・二〇～二五　米価高騰、江戸で打毀し | |
| 一七八八（天明八） | 一・二　老中松平定信、寛政改革の願文を納める<br>一二月　農村出稼禁止令。倹約令 | 一・三〇　京都大火 | 『悦贔屓蝦夷押領』<br>『文武二道万石通』<br>『時代世話二挺鼓』<br>『富士人穴見物』 | |
| 一七八九（寛政元） | 一・二五　寛政と改元<br>九・一六　札差棄捐令（旗本・御家人救済のため）<br>九・一九　囲米令 | 二・九　京都高台寺方丈火災 | 『鸚鵡返文武二道』<br>『孔子縞于時藍染』<br>『天下一面鏡梅鉢』<br>『奇事中洲話』<br>『黒白水鏡』 | |
| 一七九〇（寛政二） | 五・二四　寛政異学の禁（朱子学の振興をはかる）<br>一〇月　諸国代官に郷蔵と囲米の奨励（凶荒の際に備える） | 二・一九　人足寄場の設置<br>一一・二八　人返し法。奉公人取締り・帰農奨励を令する。旧里帰農令 | 『行儀有良礼』<br>『玉磨青砥銭』<br>『照子浄頗梨』 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一七九一（寛政三） | 九・二　異国船出没<br>一二・二九　七分積金の制を創始 | | |
| 一七九二（寛政四） | 九・三　ロシア遣日使節、根室に到る<br>一一・九　外国船漂着の際の処置令 | | |
| 一七九三（寛政五） | 六・二〇　ロシアの使節ラクスマン松前に到着<br>七・二八　老中松平定信、職を辞す | | |

注

（1）『山東京傳の研究』（一九三五年、岩波書店）

（2）『黄表紙・洒落本の世界』（一九七六年、岩波書店）

（3）『近世の文学　下』（一九七七年、有斐閣）所収。

（4）『随筆百花苑』第八巻・付録6（一九八〇年一一月）所収。

（5）『近世文芸　研究と評論』30（一九八六年六月）所収。

（6）『立正大学大学院　日本語・日本文学研究』9（二〇〇六年三月）所収。

（7）『山東京伝の黄表紙を読む　江戸の経済と社会風俗』（二〇一二年、ぺりかん社）

（8）『江戸の風刺画』（歴史文化ライブラリー22、一九九七年、吉川弘文館）

（9）『江戸の戯作（パロディー）絵本　第3巻』（一九八二年、社会思想社）より転載。

（10）（9）に同じ。

（11）（8）に同じ。

（12）『中国の古典14　史記四（別冊）』（一九九四年、学習研究社）より引用。なお引用に際しては返り点を省略し、旧字体を新字体に置き換えるなどの処置を行った。

（13）『中国の古典14　史記四』（一九九四年、学習研究社）を参照した。

（14）『江戸の戯作（パロディー）絵本　第3巻』（一九八二年、社会思想社）より引用。原本の文章に対し、ひらがなを漢字に直すなどの改変を加えている。

（15）『黄表紙総覧』（一九八六年、青裳堂書店）、『江戸の戯作（パロディー）絵本　第三巻』（一九八二年、社会思想社）、『江戸の戯作（パロディー）絵本　続巻二』（一九八四年、社会思想社）、『山東京傳全集　第二巻』（一九九二年、ぺりかん社）を参照し、引用しながらまとめたもの。

（16）（15）に同じ。【　】内に出典を記した。

(17)『新・国史大年表　・国史大年表　第五巻－Ⅱ』（二〇一〇年、国書刊行会）、『江戸時代265年ニュース事典』（二〇一二年、柏書房）を参照した。

―ありき・しおり　日本文学科四年生―